

令和 6 年 9 月 17 日現在

機関番号：82621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00146

研究課題名（和文）日本における70ミリ劇映画文化の受容とそのイメージの復元

研究課題名（英文）A research on the 70mm film culture in Japan and the restoration of the films

研究代表者

富田 美香 (Tomita, Mika)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員

研究者番号：30330004

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、70ミリ劇映画の保存と再現にむけ、日本映画史上重要な70ミリ作品の媒体固有の表現の復元に必要な調査として、(1)国内の70ミリ劇映画の受容、(2)70ミリ上映に関する機器及び技術の維持方法、(3)三隅研次監督『釈迦』（大映、1961）の最適な復元方法、を明らかにすることにおいた。研究期間はコロナ禍の延期で5年間となり、初年度に(1)70ミリ映画館の分布状況と、(2)必要な機器及び技術の維持方法を、2年目以降は(3)『釈迦』の国内外の資料とフィルムの所在調査および検査を行い、最終年度に報告会を実施し、調査・復元方法を報告したことで、研究目的を概ね達成することができたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の本来の意義は、日本映画史上初の70ミリ映画『釈迦』の復元を実際に行うことができた時に初めて認められるものと考え、復元費用や権利問題等で現状ではまだ実施できる状況には至っていない。しかしながら、学術的意義としては、第一に、復元にむけた必要な資料及び現存フィルムの所在調査・検査をほぼ終え、復元する際の指針をまとめたこと、第二に、従来あまり知られていなかった『釈迦』の製作プロセスの詳細や、撮影・録音・美術にいたる技術的な挑戦と表現、海外での評価、を明らかにしたこと、第三に、報告会をとおしてフィルムアーカイブ、映画復元、70ミリ映画に関する社会的関心を高めたことにある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to identify the following three points of investigation necessary for the restoration of medium-specific expressions of important 70mm films in the history of Japanese cinema: (1) the culture of 70mm films in Japan, (2) how to maintain equipment and technique related to 70mm screening, and (3) the best the best way for the restoration of Kenji Misumi's "Shaka" (Daiei, 1961).

The research period was five years due to the postponement because of the COVID-19. In the first year, I researched above (1) and (2). In the second and subsequent years, (3) a survey of non-film materials and films related to "Shaka" were conducted in Japan and abroad, and inspection on the films. At the end of the final year, a debriefing was held to report the results of the research and the best way for the restoration of it.

From the above, it can be said that the objectives of the research have been achieved.

研究分野：映画史

キーワード：映画学 フィルムアーカイブ 映画史 日本映画 大型映画 70ミリ映画 釈迦

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の着想は、基盤研究(C)「70ミリ映画のアーカイブにむけた基盤形成」(課題番号:16K02356、事業期間:平成28年度~平成30年度)の研究において、今後の課題として残さざるを得なかった以下(1)から(3)によっている。

- (1) 70ミリ日本映画の三隅研次監督『釈迦』(大映、1961)、田中重雄監督『秦・始皇帝』(大映、1962)の2作品は、上映可能な70ミリのポジ・フィルムは国内に現存しておらず、海外にも残っていないと思われる。70ミリ映画の“媒体固有の芸術表現”を再現するためには、フィルム復元の意を含めた70ミリニュープリントの作製が必要である。しかしながら、70ミリの現像は、国内ではもはや不可能であり、世界的にもクオリティの高い70ミリフィルムの現像をできるのは1社しかいないため、喫緊の課題であり、さらにこの復元には、海外の専門機関や現像所との連携と綿密な調査・打ち合わせが必須である。
- (2) 国立映画アーカイブが所蔵する黒澤明監督の『デルス・ウザーラ』(ソ連、黒澤プロ、1975)70ミリプリントは、1975年当時の保存状態のよい貴重なプリントの可能性が高い。同プリントの保存と活用には、同プリントを参照してフィルム復元やニュープリントの作製を視野に入れ、海外に現存する同作の70ミリプリントとの比較調査、ネガ所蔵の海外機関との共同調査・調整が必要である。
- (3) 日本における70ミリ劇映画の受容史を明らかにするには、関西、中部などの主要地域もとらえる必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究では、これまでの研究成果を発展させ、70ミリ上映の安定化と日本の映画史上重要な70ミリ作品の媒体固有の芸術表現の再現を取り戻すことを目的として、上述の残された課題をもとに、3年間の研究期間で以下(1)から(3)を明らかにすることとした。

- (1) 国内主要各地での70ミリ劇映画と映画文化の受容様態  
1950年代から1970年代にかけて世界を席卷した70ミリ劇映画文化は、日本各地で具体的にどのように受容されていったのか?  
具体的には、大型映画館の代名詞といえるシネラマスクリーンを有していた都市での70ミリ劇映画の受容様態や利用状況のなかで、日本人監督による70ミリ作品がどのように受容されていたかを明らかにする。
- (2) 欧米での70ミリ映画の上映に関する機器及び技術の維持方法  
70ミリ映画の真正な再現に必要な上映機器および技術の伝承にむけ、海外でとられている最善の方法は何か?
- (3) 三隅研次監督『釈迦』(大映、1961)、黒澤明監督『デルス・ウザーラ』(ソ連、黒澤プロ、1975)の最適な復元方法  
70ミリ日本映画第1号の『釈迦』(大映、1961)、70ミリ映画として各国で公開され高い評価を得た『デルス・ウザーラ』(ソ連、黒澤プロ、1975)について、フォトケミカルでの70ミリフィルム復元が可能か?オリジナルの画・音の再現に近い最適な方法とは何か?

以上を明らかにすることによって、日本映画史上重要な作品の媒体固有の本来の芸術表現を現在に甦らせ、次世代に伝えるとともに、文化財修復、映画復元の技術と知見の高度化をはかることができると考えた。

### 3. 研究の方法

前項で述べた(1)については主に文献調査、(2)については70ミリ映画の保存と上映のノウハウを有する海外のアーカイブや上映組織の視察及びヒアリング調査、(3)については文献調査と対象作品の権利者およびネガフィルム所蔵組織の協力によるフィルム調査、が必要である。

とりわけ(3)については、映画復元に必要な事前調査として、音素材や各種フィルムの検査を実際に行うことが必須であるため、それらの調査・検査の専門家に協力をあおぎ、音素材については、宮野起氏(Audio Mechanics、Film Preservationist)、映画復元およびフィルム検査についてはAdrian Wood氏(映画復元専門家、OWL Studio株式会社代表)の協力を得て、調査体制を整えた。その上で、具体的に以下の方法をとった。

(1)については、『映画年鑑』『キネマ旬報』『映画技術』(現『映画テレビ技術』)『映画撮影』『合同通信』などの基本資料や、東京、関西、名古屋の映画館をまとめた文献調査に加え、これらの地域の公共図書館に所蔵されている地方紙を、マイクロフィルムや縮刷版で閲覧する方法

をとった。

(2) については、70 ミリ上映の現地視察やヒアリングの調査先として、70 ミリ映画祭開催機関（於：アメリカ、チェコ、ドイツ、オスロ、オーストラリア）を、また、国際フィルムアーカイブ連盟会員機関とはメールを通じて調査をすすめることとした。

(3) については、オリジナル表現の再現に必要な技術的課題を明らかにし、日本の映画史上重要な70 ミリ劇映画の復元方針を検討するために、まずは『釈迦』の著作権者(株式会社KADOKAWA)にネガフィルムおよびポジ・フィルムの所在とそれぞれの状態について情報提供を依頼し、その情報を含めて現像所 (IMAGICA、フォトケム)、サウンド復元ラボ (Audio Mechanics) などの打ち合わせを行い、復元方法、スケジュール、体制、予算などの考え方を共有した。その後、Adrian Wood 氏の協力を得て、復元に必要な事前調査として、海外の文献および現存フィルムの所在および状態調査をおこない、復元方法を検討することとした。

#### 4. 研究成果

3年間の研究目的・方法を計画したが、初年度の2020年2月からコロナ禍による入出国制限、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置による出張自粛期間が続き、他機関への出張を伴う調査の実施が難しくなり、研究期間の延期を重ねることとなった。他方で、文献調査によって日本映画史上初の70 ミリ映画『釈迦』の、70 ミリ映画ならではのさまざまな技術的挑戦が明らかとなり、またオリジナル・ネガの状態や現在のフィルム現像の問題から、『釈迦』本来の「芸術表現」と「技術」を復元し、次世代にも残すことを最優先課題と考えるにいたった。そのため、出張を伴う調査は、初年度の海外出張と最終年度の国内でのフィルム検査に絞り、対象作品も、ロシアのウクライナ軍事侵攻の影響もふまえ、『釈迦』1本に絞ることとした。以上の変更を経た研究成果について、研究目的(1)から(3)の順に以下に記す。

##### (1) 国内主要各地での70 ミリ劇映画と映画文化の受容様態

1950-1970年代の『映画年鑑』『キネマ旬報』『映画技術』(現『映画テレビ技術』『映画撮影』『合同通信』などの映画雑誌を主な対象として70 ミリ映画に関する記事収集と、『釈迦』の公開情報を主要全国紙およびそのローカル版、『京都新聞』など地方紙の調査を行った。その結果、1960年代初期の70 ミリ映画上映ピーク時には北海道から九州まで下表のように70館以上の70

ミリ映画上映館が存在し、また、配給・上映系統の関係からシネラマ映画と70 ミリ映画、35 ミリ映画が複雑に混在しながら上映されるなど、受容の仕方が地域ごとに異なる状態であったことが明らかとなった。

『釈迦』70 ミリフィルムでの上映については以下のとおりである。

『釈迦』はスーパーテクニラマ70という、撮影時にフィルムを水平に走らせてダブルフレーム撮影(通常の1コマは4パーフォレーション分だが、ダブルフレームの1コマは8パーフォレーション分)をするビスタビジョンカメラに、デルラマ・レンズをつけて、1.5:1の圧縮をかけたネガ画像を作り、焼付時に拡張比

都道府県	映写機	劇場名	都道府県	映写機	劇場名
北海道	ニチオン	札幌劇場	大阪	ニチオン	なんば大劇
北海道	ニチオン	札幌松竹座	大阪	ニチオン	ニューOS
北海道	フジセントラル	旭川スカラ座	大阪	ニチオン	梅田スカラ座
北海道	フジセントラル	旭川劇場	大阪	ニチオン	南街劇場
宮城	ニチオン	仙都大映	大阪	ニチオン	近映大劇
宮城	ニチオン	東北劇場	大阪	ニチオン	上六映劇
宮城	ニチオン	仙台スカラ座	大阪	ニチオン	大阪スバル座
千葉	ニチオン	千葉劇場	大阪	ニチオン	梅田松竹セントラル
東京	フィリップス	東京有楽座	大阪	ニチオン	布施東宝
東京	ニチオン	松竹ピカデリー	京都	ニチオン	京都松竹座
東京	ニチオン	東京劇場	京都	ニチオン	京極東宝
東京	ニチオン	帝国劇場	京都	ニチオン	京都パレス
東京	ニチオン	日生劇場	京都	ニチオン	京都大映公楽
東京	ニチオン	新宿ミラノ座	兵庫	ニチオン	神戸阪急会館
東京	ニチオン	新宿松竹ピカデリー	兵庫	ニチオン	神戸新劇会館
東京	フジセントラル	渋谷パンテオン	兵庫	ニチオン	神戸繁楽館
東京	フジセントラル	渋谷松竹	兵庫	ニチオン	姫路帝劇
神奈川	フジセントラル	川崎グランド劇場	和歌山	ニチオン	和歌山日の丸劇場
神奈川	フジセントラル	小田原中央	岡山	ニチオン	テアトル岡山
群馬	ニチオン	高崎オリオン	広島	フィリップス	広島朝日会館
群馬	ニチオン	前橋オリオン座	広島	ニチオン	福山大劇
長野	フジセントラル	長野パレス	山口	ニチオン	下関市民会館
長野	ニチオン	松本中央	愛媛	ニチオン	松山スバル
富山	ニチオン	富山たから劇場	北九州	ニチオン	小倉中央会館
石川	ニチオン	金沢パル菊水	北九州	ニチオン	小倉中央グランド
石川	ニチオン	金沢北国会館	福岡	ニチオン	福岡朝日会館
福井	ニチオン	テアトル福井	福岡	ニチオン	福岡松竹座
福井	ニチオン	福井メトロ	福岡	ニチオン	福岡スカラ座
岐阜	西独ホブネル	岐阜繁楽館	福岡	ニチオン	大牟田大天地
静岡	ニチオン	浜松中央劇場	福岡	フジセントラル	大牟田グランド
静岡	ニチオン	浜松東洋劇場	佐賀	ニチオン	佐賀有楽劇場
愛知	ニチオン	テアトル名古屋	長崎	フジセントラル	佐世保カスバ
愛知	ニチオン	名古屋今池劇場	熊本	フジセントラル	熊本大洋
愛知	西独パウエル	名古屋毎日ホール	熊本	フジセントラル	熊本新世界
愛知	ニチオン	豊橋松竹	宮崎	ニチオン	宮崎橋会館

1:1.5 をかけてオプティカル・プリンターで画像を復元し、非圧縮の 70 ミリプリントを作成する方式のため、国内では 70 ミリプリントを現像できず、イギリスのテクニカラー社のラボで現像した。70 ミリプリントは合計 4 本（『映画年鑑 1963 年版』より）作製され、永田雅一、録音技師の大角正夫がイギリスから帰国時に携帯した 2 本のプリントを使って、11 月 1 日から東京有楽座（～1/19）、大阪南街劇場（～12/21）にて公開された。翌月 2 本が追加され、合計 4 本で 12 月 22 日から、継続の東京有楽座に加えて、名古屋・毎日大劇場、福岡・朝日会館、札幌・松竹座の 4 館で上映され、2 月から、旭川スカラ座（～3/28）、神戸阪急会館（～3/12）、広島朝日会館（～3/14）、近畿大劇場（～3/19）と順次公開されていった。3 月以降も、京都公楽（新築開館 3/4～4/10）、金沢北国会館（3/16～4/19）、熊本大洋劇場（3/17～4/13）、仙台大映（3/21～4/24）、浜松大映（4/13～5/17）で 70 ミリ上映が行われた。3 月 4 日からはテクニカラー IB プリントで 52 本（『映画年鑑 1963 年版』より）作製された 35 ミリのシネマスコープ版が全国 24 館で一斉公開された。

『釈迦』は、これらの上映で記録的な興行成績となり、1961 年度映画テレビ技術協会の日本映画技術賞特別賞を、撮影・照明・特殊技術・美術・録音を対象に授与される成功も収めた。

### （2）欧米での 70 ミリ映画の上映に関する機器及び技術の維持方法

オスロの 70 ミリ映画祭と、大型映画の原点である 35mm フィルム 3 本映写でのシネラマ上映をハリウッドのシネラマドームに視察し、いずれも映写室・映写機器等の見学およびヒアリングを行い、70 ミリ専門家との情報交換を行った。

### （3）三隅研次監督『釈迦』（大映、1961）の最適な復元方法

『釈迦』の 70 ミリ復元について、当初の調査結果から判明した課題は以下である。

【画ネガ】 褪色度合いは補正可能な範囲で、キズやカビ、歪み、揺れ、フリッカーも復元利用には耐えられる程度。ただし、タイミングデータや F. O. / F. I. などのオプティカル処理に関する情報が残っていないため、オリジナルの 70 ミリプリントの色やカット替わり・合成等の正確な再現が難しく、35 ミリプリントなどの詳細な調査が必要。

【音素材】 35 ミリマスター（4トラック）は劣化で 1 巻目を除き再生不能。1991 年にマスターから複製したテープは利用可能。

【機材】 ネガからのダイレクトプリントは困難。使用可能なレンズは現存しない可能性が極めて高い。

これらの課題のもとに、Adrian Wood 氏の協力を通して、参照プリントの所在や状態調査を行い、アメリカ、イギリス、イタリアに現存する 35 ミリプリントの情報を得ることができ、国内のプリントと DVD 化された映像との色調、画郭等比較を 1 カットずつ行った。また、海外文献調査では、日本の『映画撮影』『映画技術』の掲載記事が多数紹介されており、海外においても注目を集めていたことがわかった。

国内現存プリント（注記以外、すべてシネマスコープ版）については、京都府京都文化博物館所蔵の 35 ミリポジフィルム、（株）KADOKAWA 所蔵のオリジナル・ネガ（35 ミリ 8 パーフォーレーション）、35 ミリデュープ・ネガ、35 ミリマスター・ポジ、35 ミリポジフィルム（貸出用）、海外用プリントのための 35 ミリ TOP タイトル、END タイトル、などアクセス可能なフィルムはすべて仔細に検査をおこなった。

文献調査とフィルム検査で明らかになったことは、国内に情報がないとされる F. O. / F. I. などについてである。テクニカラー社のプリンターが、自動で正回転、停止、逆回転などができ、F. O. / F. I.、ディゾルブ、コマ抜きも自由自在にできるシステムだった（鈴木昭成「6 ペンスの雑記帳」『合同通信映画特信帳』1962 年 1 月 14 日より）ことから、従来の国内の現像・焼付と大きく異なり、情報も残っていないと思われる。ただし、オリジナル・ネガの検査から、F. O. / F. I. やディゾルブなどの開始コマと終了コマのエッジに印（下図参照。開始コマのエッジの印と黒味の例）がつけ

られており、フェイドやディゾルブの部分には黒味もついている場合があるため、これらの情報をもとに再現することは可能と思われる。

また、『釈迦』の撮影に



は、ビスタビジョンカメラとハンドカメラ各 1 台を使い、ブローアップ用に NC ミッチェルと

アリフレックスを使用したこと（今井ひろし『『釈迦』の撮影』『映画撮影』創刊号、日本映画撮影監督協会、1962年1月より）や、デルラマレンズのハレーションに非常に苦心したことがわかり、それらの画郭の違いやハレーションの状況も、オリジナル・ネガ検査でも確認することができた（下図参照。コマの上部に、コマ下部の画像が写っている）。また、35ミリシネマスコープ版のフィルムは、テクニカラーIBプリントのため、褪色は少なく、色彩の参照用に有効と考えられる。

これらの調査をふまえ、本研究の最終報告会「[上映と報告]日本初70mm映画『釈迦』の復元にむけた調査報告」を、2024年3月20日に京都府京都文化博物館フィルムシアターにて開催した。同館所蔵の『釈迦』35ミリ・シネマスコープ版の上映後に、本研究代表者の「復元プロ



ジェクトの概要とスーパーテクニラマ70版『釈迦』の調査報告」、Adrian Wood氏による「『釈迦』現存フィルムの調査とその復元の意義」、宮野起氏のビデオプレゼンテーション「『釈迦』復元に向けた現存する音素材の調査報告」、とそれぞれの調査報告と復元方法の提案を行った。

Adrian Wood氏が提案した復元方法は、8パーフォーレーションの35ミリから5パーフォーレーションの65ミリネガの作製に使用可能な最後のレンズを見つけたことから、フォトケミカル工程の場合は、オリジナル・ネガから35ミリのインター・ポジを作製し、そのインター・ポジから65ミリのインター・ネガを作製する、という案である。ただし、フィルムのエマルジョンなどが当時と現在と大きく異なるため、フォトケミカルだけで復元することが当時の映像の再現に近いとは必ずしも言うことはできないという点で、デジタル復元の利点として当時の映像の質に“落とす”ことも提案された。あわせて、スーパーテクニラマ70の作品を13Kでスキャンしてデジタル復元を行っている最新の事例も紹介された。

70ミリプリントの『釈迦』は日本初の6チャンネル(Left, Left Center, Center, Right Center, Right, Surround)映画である。その音声の復元について宮野起氏が提案した方法は、マスターの4チャンネル(Left, Center, Right, Surround)のテープが劣化によって使用不可能なため、1991年にレーザーディスク用に複製していた6ミリテープをもとにした案である。ただし、この6ミリテープはドルビー方式で4チャンネルを2チャンネル(Lt, Rt)にしたもので、ドルビー方式でデコードしてできる4チャンネル(Left-center, left-Center-right, Right-center, Surround)はマスターの4チャンネルと異なるため、そこから6チャンネルを作るとさらに異なったものになる。また、当時と現在では劇場のスピーカー配置も大きく異なる。それらを勘案し、ドルビー方式でデコードした4チャンネルのSurroundをLとRに分配して5チャンネルにする、という案である。以上のことから、素材の復元には、スピーカーの配置など受容環境の違いも含めて精査する必要があることを改めて確認した。

これらの報告については、より広範囲に本研究の成果を還元し、実際の復元など今後の進展に資するよう、パワーポイントファイルと録音音声をもとにしたビデオを作成し、国立映画アーカイブの公式YouTubeチャンネルおよびウェブサイトから公開している。

以上をふまえ、「日本映画史上重要な70ミリ作品の媒体固有の芸術表現の再現を取り戻す」ための課題をクリアし、復元に必要な文献と素材の調査を完了して復元方法の基本的な提言をまとめることができたことから、本研究での目的をおおむね達成したと考える。残すところは、実際の復元となるが、これについては、商業的劇映画の復元だけに著作権者との相談・調整、資金確保などの課題はまだ山積しており、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

○研究報告会の企画・開催・報告  
 [上映と報告]日本初70mm映画『釈迦』の復元にむけた調査報告  
 Screening and Presentation of a Research Report on the potential for Restoration of Japan's First 70mm-released film "Buddha"  
 主催：京都府京都文化博物館、東京国立近代美術館、国立映画アーカイブ、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「日本における70ミリ劇映画文化の受容とそのイメージの復元」（研究代表者・富田美香）  
 協力：株式会社KADOKAWA  
 日時：2024年3月20日（水・祝）13：30 - 18：00  
 会場：京都府京都文化博物館 3階 フィルムシアター（定員156名）  
<https://www.bunpaku.or.jp/topics/40621/>  
[https://www.nfaj.go.jp/coorganize/others/past/coorganize\\_2023/#Shaka](https://www.nfaj.go.jp/coorganize/others/past/coorganize_2023/#Shaka)

上記に関する新聞等の記事  
<https://eiga.com/news/20240318/12/>  
<https://www.kyoto-minpo.net/event/archives/2024/03/20/post-75957.php>  
<https://cmex.kyoto/2024/03/15/42575/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ウッド エイドリアン  (Wood Adrian)		
研究協力者	宮野 起  (Miyano Oki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関